あつし塾長の

子のやる気 親の気づき

○○21

第2章・ゆとり教育世代の子育て

寄り道

遠回りが実は確実な道

先日、中1男子のお母さまから「（子どもが）家では全くやる気がなくて…」というご相談がありました。私はその子に「目標」を考えさせました。すると、しばらく悩んだ末に「部活では全国大会、入試では八高を目指します」と。「全国？では今日から何をやろうか？」と続けたら、「まず一流の選手のDVDを見ながらお父さんにポイントを教えてもらい…」。

私はあぜんとし「まずは上級生に勝てるの？」と聞いてみると、「エッ、それはちょっと…。でもやればできるって、親が…」と。私は「それは『やれば』だよ。夢はでかくて良いのだが、全国の前に、まずは校内で一番になろうよ」とアドバイスをしました。

ゆとり教育世代になり、まだ何もやってもいないのに「やればできる」と簡単に口にする子どもたちが増えました。〝やればできるスイッチ〟でもあるかのような話しぶりですが、いざやる段になると、今度は平気で自分をごまかすための口実を探します。

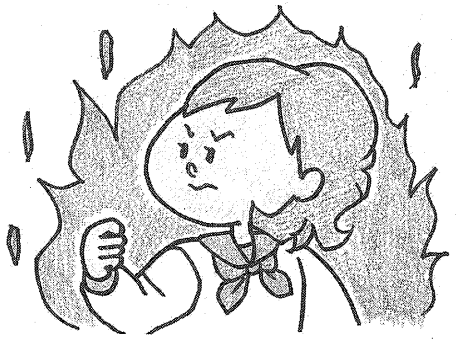
先日は、中3の授業で知らない地名が並んで出てきたときに、「難しい！」と多くの子どもたちが不満を口にしました。地図帳についているものなら調べることも可能なのに、知らないことが恥どころかまるで権利のようでした。アナログからデジタルの時代になり、辞書をめくることも地図を広げることもなく、検索すればピンポイントでヒットし〝回答〟が目の前に現れる便利な日々が子どもたちの成長に影響しているのかもしれません。

安全、安心、便利な生活の中では、五感を駆使した子育てを心掛けなければ、やはり「スイッチ人間」を育ててしまうのではないでしょうか。特に、子どもたちは学校に通うにも、塾に通うにも送り迎えが当たり前になってきています。親の車に乗って居眠りしていれば、目的地に着いていたという経験を小中高と親元を離れるまで積み上げて育ちます。だから、出発地と目的地だけピンポイントで出現するデジタルな子育てではなく、子どもたちが自ら「寄り道」できるような子育てが大切なのではないかと思います。

寄り道は、大人からすれば無駄であり、悪いことと思われがちですが、子どもたちは四季の移ろいや人々の生活の様子などから好奇心や探求心をかき立てられたり、遅刻ギリギリを味わうことで時間の大切さを身に染みたりするはずです。家を出るとき、学校や塾の扉を開けるとき、「よし、やるぞ！」という覚悟も経験できると思います。

子どもから離れず守るだけの便利な道より、寄り道できる遠回りが、実は安全で確実な道であると親が気付けば、命懸けの思いとして子どもの成長に息吹を吹き込むことができるのではないでしょうか。

（畑山篤＝志学塾塾長）



by yoriko

好奇心や探求心はぐくむ

〝都会っ子〟泥と触れ合う

作付面積の少ない日本の水田を使って〝都会っ子〟たちが、田植えや稲刈りの季節の風物詩を味わらえるのは難しいけれど、みんな子どもたち

ニュース なぜなに

教育

国が日本やその周りの地域を守る代わりに、日本は米国に対して基地を提供するということです。

日本は戦争の反省から憲法で戦力を持たないと決めたため、米国に防衛をたよることになりました。一方、米国は日本にることもあります。でも日本は、日本や周辺で軍事衝突（しょうとつ）が起きた場合、自衛隊による米軍への協力を増やすことを、この半世紀の間に決めています。

条約には問題も多くあります。